

開催趣旨

里山とは何か 自然と文化の多様性

What is Satoyama? Diversity in Nature and Culture

宮浦 富保

龍谷大学里山ORC（里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター）が、里山に関する総合研究を開始して、今年で3年目になります。

“里山（Satoyama）”という言葉は、もちろん日本で生まれた言葉ですが、海外でも知られるようになってきました。里山の重要性について、世界的な関心が高まってきています。

日本では、人々の生活の近くにある森林を里山と呼んできました。薪や柴、肥料のための落ち葉、キノコや山菜など、里山から得られる種々のものは、人々の生活になくってはならないものでした。

現代のような石油エネルギーの大量消費が行われる前、世界の多くの国々では、人々は身近な森林からエネルギーや生活に必要なものの多くを得ていました。

里山が、人と自然が長期にわたって共存してきた場所（森林）であるとすれば、世界の多くの国々は“里山”と呼んでよい森林を持っていたはずです。地域により、自然環境は異なり、成立する森林の種類も異なります。自然環境の違いはそこに生活する人々の文化にも影響しているでしょうし、文化の違いは自然を利用する方法の違いとなって現れていることでしょう。里山のありかたは、自然と文化の多様性とその歴史を反映しているのではないのでしょうか。

このシンポジウムでは、里山の自然と文化の多様性およびその歴史を考え、人々の自然観などの国際比較を通して、人と自然の共生についての理解を深めたいと思います。